
☆ラブ&ピース☆

花坂るい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

☆ラブ&ピース★

【Nコード】

N0309I

【作者名】

花坂るい

【あらすじ】

仲のいいランとペンだったけど・・・2人に色んな異変が起こりだす！！ハッピーとダウンな物語をどうぞ！！

第1章―始めに―（前書き）

これからよろしくお願いします。

第1章―始めに―

あたしは、ラン。そしてこっちの男がペン。

そんな2人を、周りのみんなは・・・

“ラブ&p;ピース” と呼び始めた。

―ラブ&p;ピース―#1

ペン 「ラーンラーン！！！！！！！！遅刻すつぞ！！！」

今の時間は7時46分。

ランはまだパジャマだったけど…遅刻してしまう…

ラン 「うっさいな…朝っぱらからなんだよ…」

ランは窓の外をのぞいた。家の前に、赤い自転車に乗ったペンがいた。

ラン 「朝っぱらから、可愛い乙女になんちゅー言葉遣いなのか！！！！」

ランがえらそうに言った。

ペン 「うつせー!! あー!! まだパジャマかよつ。間に合わねーよ!!!!!!!!」

ペンが怒った口調で言った。

(ドタツ・・・ドタツ・・・)

ゆっくり階段を降りて行く…。

(ズルッ!!)

誤って足を滑らした。

(ガダダダダダ!!!!)

ラン 「いってえ~~~~!!!!!!」

ランはでかい声を出した。

母「なに：朝っぱらからうるさいわよ？起きたんなら早く準備して!!!!早く早く!!」

そして準備が終わったのが20分後。8時06分。

(ガチャ)

やっと玄関のドアが開いた。

ラン 「ごめ〜ん：フワァ〜」

またのんきにあくびをしている。

ペン 「いちいちうるせー。早く乗れ!!」

ランはペンの自転車の荷台に乗った。

ペン 「出発しんこー!!」

ペンは急に顔色を変えた。笑顔になった。

いつも近道と言えば、海岸沿いを通る。
潮くさくってちよつと寒いカンジが好き。

『キーンコンカーンコン』

ペン 「ヤバイ!! 鳴ってるぞ!」

ラン 「早く!! もっと漕いで!! 早く早くっ!!!!!!??」

(シャー~~~~~)

すごいスピードで自転車のタイヤが周る。

(キキーツ)

校門に入ったのはその30秒後。自転車の速度の新記録だ!

渋谷先生 「ちよつと…遅いぞ。その2人!!」

校門のど真ん中に立っていた先生を通りすぎようとした時、渋谷先生が怒った。

ラン (いいから行かせろ!! エミが待ってるんだよ!)
ランは親友のエミの事を考えていた。

ペン (あー早く通らせろ!! タクトが待ってるんだよ。クソジジイ!!!)

2人はギンギンしながら先生の説教を聞かされた。

そして通り過ぎたのが15分後:
もう授業が始まる寸前だった。

(ガラガラ)

ラン 「お・・・おはよ・・・」

エミ 「どうしたの? 元氣無いね」

ラン 「そりゃ・・・ね?」

ランはペンの方を見た。

ペン 「そ・・・うだな」

そして2人は各友達のところへ行った。

エミ 「ねーねー今日も合コン行く? 兵熊高校の男子に声かけられたんだ」

今言えば、ランはこの、高島高校の人気NO.1とも言える女子だろう。

お肌の具合○、髪の毛の匂い○、メイク○…。

相談をされやすく、先輩、後輩からの尊敬されてる女子2年3組・
・ラン。

人気雑誌にも毎掲載っている。

ラン 「合コン行く♪最近彼氏作ろうと思って!!」

ラン (チラ:)

ランはペンの方を見てみた。:やっぱりこっち見てる:

(なんなの::?)

そしてすぐにペンは目をそらした。

(...?...)

エミ 「ね!そーいえば:あの黒板見た?」

エミは黒板を指差した。
するとそこには::!!

『ラン&ペンで♪』

をピンクのチョークで書いてあって:

『2人あわせて』...が水色で:

『☆ラブ&ピース★』が黄色&白!?

ラン (なななななな! ? ラブ? ? & a m p ; ? ? ピーリースー
ー! ! ! ? ? ?)

ランはびっくりした顔をした。

男子 「ははっ今気付いたか! ! なんかお前らさく…気イ合うみて
エだし? 朝、一緒に来てるからカップルじゃねーの? と思って! !」

ラン (はあ! ? 意味わかんない! ! そそそそんなカップルなんか
じゃないよ…)

ラン 「まままま待って? あたしとペンはそーいう関係じゃなくて
…」

男子 「どーいう関係? ?」

ラン 「普通の幼なじみで…ただの友達だよ! ! そんなカップルな
んかじゃないから! !」

ハッキリといった。

そのおかげか男子は何も言わなくなった。

そしてエミがランのソデを引っ張った。

エミ 「けど…この、雑誌…“ファイブティーン”でもそんな
らしき事が…

ほら、見て…ここ。“今の女子アイドル、ランちゃんと今の男子ア
イドル、ペン君がコンビした名前…『ラブ& a m p ; ピース! !』

”だって・・・ラン、これ認めるの?”

ランは微妙な顔をした。

ラン 「そんなの意味わかんないってば・・・男子がいけないのよ!! 勝手に決めるんだから」

エミは（ふくん）と言った。

するとペンがランを呼び出した。

ペン 「ちょい・・・ラン来て」

男子 「お!! 何の話すんのかな!?”
期待するような目で男子は言った。

ペン 「うるせーよ」

ペンは真面目な顔で言った。男子は黙った。

ペンに連れて行かれたのは屋上だった。

ラン 「ちょ!! どこ連れていくのよ」

まだまだ引っ張られる。そして手すりのところまで連れて行かれた。このまま押されれば、もう落ちる。

ラン 「ねえ、待って!! さっきからなんなの?”

ペン 「お前：目立ちすぎ。俺まで巻き込むなよ・・・っ!!」

するとペンはランの頭をわしづかみにされた。
そして

（（グイ!!!!））

落とされるのだ。

手すりを乗り越えさせられ、背中を押された。
後20cm歩けばもう、落ちてしまう。

ラン 「ちょっとやめて!! 怖い!!」

ランは必死に暴れた。

それでもペンは助けようとしなない。
逆に、落とそうとしている。

背中に手を当てたままペンは黙った。

ラン 「何!?! 何がしたいの!?!」

ランは焦った。

ペン 「これ以上目立つと：次は：完全に落とす・・・!」

何が起こったのかランはわからなかった。

ラン （何??! わかんない!!）

すると（（ビューーーーーー））

強い風が吹いた。

その瞬間、ランの足元がふらついた。

「あっ…キャー!!!」

ランは叫んだ。

ペンの顔がどんどん遠くなる。

ラン 「ペーーーーー!!!!!!!!!!」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

それからの記憶がない。

目を開けると、ペンがランの下敷きになっていた。

顔を怪我している。

ラン 「え・・・？」

ランは起き上がった。

そしてペンを見た。

ラン 「ちょっと・・・。何よこれ。」

するとちょうど、深野先生が来た。

深野 「ちょっと！！どうしたのかしら！？キャー！！ペン君！？」
深野の声に気付いてみんな集まってきた。

ランは辺りを見渡した。

周りの人 「キャー！！ペン君が倒れてる！！！」

周りの人 「ペン！！どうしたんだ？」

（(ざわ・・・ざわ・・・)）

学校の窓からのぞいてくる人もいた。

その中心に向けられた視線はペンではなく・・・
ランに向けられていた。

＼#2＼

深野 「ちよつと・・・どういふ事か説明してもらいましょうか」

ランは戸惑った。

ラン 「あたし・・・、ペンに誘われて・・・屋上に来たんです。
そしたらペンに、目立ちすぎだ・・・って言われて突き落とされて・
・それから記憶がありません」

ランは正直に言った。だけど・・・

周りの人 「ランさんがペンを下敷きにするようにして落ちたんだ
！！絶対そうだ！！」

ラン 「・・・は・・・？・・・」

ランはもっと戸惑った。

周りの人 「そうだく！！ランちゃんなんてそんな事普通にやりそ
う・・・」

みんなランを責め始めた。

すると

「んな事疑ってどうすんの？」

誰かの声だ。

そこに立っていたのは・・・

エミだった。

周りの人 「疑ってって・・・ランがペンを落としたに違いない！」

エミ 「は？その証拠はどこにあるの？」

周りの人は1歩下がった。

エミ 「あんた達ね・・・

今まで・・・ランのどこを見てきた？外見だけか？

それともただの可愛い人形か？

ランがそんな事すると思う！？」

周りの人は黙った。

周りの人 「あたし・・・やっぱランチャンを信じる。さっき疑ってごめん」

けど今は謝ってる場合ではない。

ペンが何をしたのか、どうなったのか？

深野 「とととととにかくみんな！！解散！！はいはい！みんな教室帰って！！ランさんには校長室に来てもらいます。」

―校長室―

校長 「なるほど・・・」

深野 「それから記憶が無いって・・・」

校長 「ランさん・・・ちょっと聞きますが・・・本当に突き落とされたんですね。」

ランはうなずいた。

校長 「わかりました。下がちなさい。」

そしてランは校長室を出た。

ドアを閉めたもののランはドアに隠れて話を聞いた。

校長 『フー……』

深野 『こ、校長先生！？ランさんを信じるんですか！？』

校長 『……』

多分今のはうなずいた……とランは思った。

深野 『何ですか！！あんな成績の悪い子……』

校長 『あなたは……何しにここの学校へ来たのですか。みんなを助ける……でしょう？』

そしてその後の話は聞かなかった。

校長 『……』

深野 『……』

ランは教室に入った。

（（ガラ））

そこにペンの姿は無かった。

ラン 「……」

エミ 「さっきのって……なんだったの？」

ランは今までの事を話した。

エミ 「ふゝゝん・・・そうなんだ・・・大丈夫だよ。それはペ
ンが帰ってきてから話す事だから・・・まずは・・・落ち付こー！」

ラン 「そうだね・・・」

すると（ガラ）

ペンが入ってきた。

そしてペンがランに近づいて来た。

ゝ続くゝ

第2章―ラブ―

★あらすじ★

仲のいいランとペンには、“ラブ&ピース”という名前が付けられてしまったが…

ペンがそれを嫌がったのか？ランを屋上から突き落としたが！！ランが目を開けるとななななんと！！！！ペンが下に！？どーいうこと？

~~~~~

ペン 「あのさ…今日も…一緒に帰ろうな。」

ラン (へ?)

ランは思わずうなずいてしまった。

そしたらペンはタクトのほうへ行った。

エミ 「なんなの？？何かおかしいよ！」

確かにそうだ。さっきはランにイライラしてたのに、今は性格をコロっと変えて…

エミ 「なんだか…おかしい！！！」

ラン 「いやいや…そんな深く考えなくてもいいってば!!」

1時間目の授業は家庭科だった。  
家庭科室で調理実習だ。

(ジャッジャッ!!)

ランは慣れた手つきで野菜を炒めた。

フユカ 「キャー!! ランちゃん上手♪♪」

フユカの声でみんな集まってきた。

周りの人 「うわースゲー!!」

周りの人 「すごっ」

あっという間に、料理が出来た。

エミ 「フウ…ランと同じ班でよかった。何にもしなくてもラン  
がやってくれるから」

ラン 「ちよっと!! あたしだけって!! ヒドイ」

ランは怒った口調で言った。

もちろん味もダントツで美味しい。

そういう所もモテる1つだ。

（放課後）

?? 「あの…ランさん、ちょっといいですか？」

名前のわからない人に呼ばれた。

来たのは屋上だった。

ラン 「なんですか？」

?? 「僕の名前はケイです。3年5組。」

ラン 「は、はい・・・」

ケイ 「あの…！！付き合ってください…！！」

ラン （えーーーー！！3年…！！？？？）

ランは迷った。すると

（（ガチャ…））  
ドアが開いた。

ランは後を振り返ってみた。

そこには…

ペンがいた。

ペン 「ラン…やっと見つけた…」

ペンは息切れていた。

そして頭を深くさげているケイを不思議そうに見た。

ペン 「どうしたんだよ…そいつ」

ラン 「しっ！！3年生よ！！」

ペンは驚いた。

ペンは告白中だと知ると出て行った。

ついにランは答えを出した。

「よろしくお願いします！！」

OKしたのだ。

屋上のドアの陰で聞いていたペンは冷や汗がたれた。

### 第3章―離れ―

＊あらすじ＊

ケイ？という人に告られたラブ：

ラブの答えは「よろしくお願いします」：

陰で聞いていたピースは冷や汗をかくことに。

~~~~~

ケイ 「マジっすか！？ありがとうございます！！！」

そして、ケイとランは歩き出した。

2人で。

すると陰にいたペンが顔を出した。

ペン 「帰ろ…」

けれど・・・ランはペンの方を見てくれなかった。

ラン 「今日…プリ撮って…近くの喫茶店に行かない？」

もうケイと仲良くしている。

ケイ 「はい！！喜んで！！今日は僕が全部おごります！！！」

そして2人はキャキャ言いながら階段を下りていった。
壁に寄りかかっていたペンは絶望的になっていた。

ペン 「ウソ…だろ??なんで…アイツが…??」

ペンは開け放たれた屋上のドアの外に浮かぶ、白い雲をながめた。

ペン 「もう…俺ら…友達なんだな…」

~~~~~

プリ機 『でわ、撮りまゝ☆3!2!1!』

( )(カシャ!!!)( )

大きく光りだした。

ラン 「わーケイくん良く写ってる☆アハハ!!」

しかしケイは黙っていた。下を向きながら。

ラン 「ケイくん?どうしたの?」

ケイ 「…俺…なんかでいいのかな…」

ラン 「なに?いきなり…?私が決めたんだもの。それでいいのよ」  
するとケイは顔を上げた。

ケイ 「サンキュー!!」

プリ機 『2枚目行くよ☆3、2、1!!』

（（カシャ））

~~~~~

ペンはずっと下を向いていた。

人にぶつかっても気にせず、携帯が鳴っても気にしなかった。

ペン 「俺らは…そういう関係じゃねーのかよ…」

ペンは後悔したような顔をして頭をわしづかみした。

~~~~~

その頃ランは幸せだった。

かっこいい男の子に告白されて。

ラン 「ん〜!! このパフェおいし〜♪一度だけでもいいからこんなの食べてみたかったんだ〜」

ケイ 「食べたことないの？」

ラン 「うん…あんまりね…」

そしてケイはあることを聞いた。

ケイ 「ペン…あれからどうしたんだろ…」

ランはその言葉につっかかった。

そしてランは携帯を取り出して、『ペン』の所を電話帳から開いた。メールをした。

『こんちゃー!!ランでーす☆さっきはゴメンネ←明日でも、ゲーセン行く?』

(送信)を押した。

~~~~~

ペンの携帯が鳴った。

ランからのメールだけは着信音を変えて、ランから来たときだけ皆と違う音楽が流れる。
その曲が流れている。

ペンは目を見開いて携帯を開いた。

メールが来ていた。そこには…

『こんちゃー!!ランでーす☆さっきはゴメンネ←明日でも、ゲーセン行く?』

と書かれてあった。ラン独特の字の打ち方だった。

ペン 「ラン…。」

そしてペンは打ち返した。

『ゲーセンかぁ…ケイ先輩と行くような喫茶店がいい』
ちょっとワガママっぽく言ってみることにした。

ペンはほんのり笑った。

~~~~~

ランの携帯が鳴った。

( ( ヴーッ ヴーッ ヴーッ ) )

ランは携帯を開いた。

そこには…

『ゲーセンかあ…ケイ先輩と行くような喫茶店がいい』  
と書かれてあった。

ランはため息をついた。

ラン (ペン…何を思っているの？あたしたちは…)

ケイ 「どうしたの？メール？」

ラン 「あっ、うん…友達から…」

ランは、ペンとメールしている事をあえて言わなかった。

ケイ 「そうなんだ。友達と仲がいいんだね…」

ケイは優しく言ってくれた。

なぜ、ケイの話し方は優しいのか…とランは微笑んだ。

ランは携帯を閉じた。ペンへの返信は書かずに。

その後、2人は、デートのように街を楽しみ、ペンはランの家まで送ってくれた。

ラン 「ありがと…今日はすごく楽しかった。ありがとう。じゃ…  
おやすみ…」

ランはケイに手を振った。

そしたらケイも振り替えして、歩いていった。

### 第3章―離れ―（後書き）

！  
どうでしたか？楽しんでいただけましたか？次回もお楽しみに！

## 第4章―混―（前書き）

恋物語です☆切っても切れない2人の絆。  
それがまさに「ラブ&ピース」・・・。

## 第4章―混―

★あらすじ★

ケイという3年生に告られた、ラン。

しかしランはそれを後悔していくことになる・・・。

~~~~~

〳次の日〳

学校に行くとき、家の前には・・・

ペンではなく

・・・

ケイがいた。

ケイ 「おはよう!! ランちゃん!!」

ラン 「あ・・・れ・・・?」

ランはなにかおかしいような気がした。

ケイ 「どうしたの? 早く行こうよ。ほら後の席に座って」

そしてランはケイの自転車の荷台に乗った。

ケイ 「昨日楽しかったよね」

ランはうなづく。

ケイ 「また行こうね」

ランはうなづく。

ケイ 「今度は…映画でもいく?」

ランはまたうなずいた。

それからケイが何回も話しかけても、ランはうなずくだけ。
なにか変・・・とケイは思った。

そしてついに自転車が止まった。

ちょうど海沿いを走っているときだった。

（（キキッ））

ラン 「・・・？・・・どうしたの？」

ケイはこっちを向いた。

ケイ 「ランちゃん・・・どうしたの？さっきから様子おかしい。
何かあったの？」

ランは口元がきつくなった。

こんな時に（ペンがないから）なんて言ったら・・・

ーダメダメ・・・。私・・・自分で決めたんだもん。ケイと付き合
うってー

ラン 「ああ、昨日寝るの遅くてさ！ちょっと寝不足みたいで・・・」
ランはウソをついた。

ケイ 「そっか、大丈夫？」

ランはうなずいた。

教室に行くと 入り口の近くにペンがいた。

ペンは、ランに気付くと……近づいてきた。

ペン 「ラン……おはよ……」

ペンがそっと言ってきた。ランは、ドキツとした。

そして何も言えなかった。

「なんで……なんであたし……ペんに返事ができなかったの！？」

ペンは購買に行ってしまった。

ケイ 「じゃ、中休みね。」

ケイはランに手を振った。

～放課後～

エミ 「ラン！！今日……ケイと帰るの？」

エミがランの肩を触った。

そしてランがうなずいた・・・。

エミ 「そっか・・・ペンとはもう別れたの？」
はな

ラン 「・・・・・・・・・・・・・・・・」 ランは黙った。

エミ 「そっか」

エミが歩いて行ってしまった。

ランは・・・立ちすくんだ。

ラン （あたし・・・なんでケイと付き合うことになったんだろう・・・）

あの日、そう あたしがケイに告白された日。
息切れしてたペンが屋上に来たんだよね・・・？

ペンはあたしと帰りたくて・・・・・・・・・・
走って探してたの・・・？)

ケイ 「ランちゃん！ここにいたんだね、早く帰ろう？」

ケイが来た。

しかしランは固まったままだった。

ケイ 「・・・ランちゃん？帰ろ？」

ラン 「あたし・・・今日ひとりで帰る。ばいばい！」

そしてランは急に走り出した。

ケン 「えっ！？ランちゃん！！？！？ちょっと待ってー」

ケンが追いかけてきた。

ランが立ち止まった。

ケイ 「ランちゃん! どうしたの・・・ハア・・・ハア・・・」

ラン 「あたし・・・」

ラン 「あたし、ケンとは付き合えないよ・・・っ・・・」

ランは涙がこぼれた。

ケン 「……え、なんで？」

すると

『……』

ランの携帯が光った。

『ペン』と書いてあった。

ラン (ペン!?)

ラン 「は、はい……」

すると向こう側は荒々しいような音をしていた。

?? 「ああ!!!!!! ランちゃん!?! 私! ペンの母だけど!! ハア
ハア・・・あのね・・・!!!!!!」

ランはまた足がすくんだ。

ペンの母 「ペンが事故にあったの!!!!!!!!!!!! ゼエゼエ。」

ラン 「え・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ランは携帯を落とした。

ラン 「え、うそ・・・・・・・・。どこで・・・・・・・・。」

ランは携帯を拾った。

ペンの母 「そうねえ・・・・・・・・！！！！！！どこかはわからないけど・・・・・・・・！！！！！！」

ペンの母 「携帯を持ってたんだけど！！ゼエゼエ そのー！！！！！！」

なんだか急いで走っているようで 言葉が出てこないようだ。

ペンの母 「えっとー!!!!電話かけようとしてたみたいで!!!!」

ラン 「・・・誰にですか!?!」

ペンの母 「ええ!!?!?!さっきから・・・!!!!」

ペンの母 「あなたに電話かけてたみたいなんだけど・・・!!!!
来なかった!?!」

ランはわからなかった。前授業中に携帯をこっそり使うために着信音をOFFにしていたからだ。

今はちょうど携帯を手に持っていたから気がついたのだ。

いつもならバッグに入っているので光っているのもわからない。

そして電話が切れた。

救急病院はたしか学校から徒歩10分の所だ。

ケン 「ランちゃんどうしたの!?!? なにかあった!?!?」

ラン 「ケン……。ごめんなさい。ペンが事故った。」

ケンは驚いた。

ケン 「そっかぁ大変だね……。あ、そうだ！新しくできたそこにある喫茶店行かない？」

ランは涙があふれた。

ラン 「ごめんなさい、ケン。あたし……………」

ケン 「どうしたの？まさか……ペンを想っているの！？」

ケンは急に怒り出した。

ケン 「なあ！ランちゃん！いつも思ってたんだけど、ランちゃんってまだペンの事好きなんでしょ！

わかってたよ……。けど、僕……。辛いんだ！ランちゃんはずっとペンの事引きずるの！

悔しいんだよ！」

するとランは携帯を落とした。

ラン 「ケン・・・ごめんね。あたし・・・ペンを忘れられない。

ケンがあたしの事・・・好きなのはわかったの。すごく優しい人なんだなってわかった。」

ケンが下を向いた。

ラン 「けどやっぱり・・・ペンとラン・・・そうあたしとペンはみんなにはわからないような絆があるの・・・。

ケンにはわからない!!!!!!!!!!みんなが言ってるように――

あたし達は“ラブ&ピース”なの!!!!!!!!!!」

そしてランは走って行ってしまった。

）
続
く
）

第4章―混―（後書き）

楽しんでね♪

第5章―苦難―（前書き）

うわーやべーW

第5章―苦難―

★あらすじ★

ケイと付き合い始めた、ラン。けれどペンが事故にあいランがケイを捨てて走りだした・・・ケイがとった行動とは！？

~~~~~

ケイ 「ちくしょ・・・。」

ケイが顔を手でふさいだ。

そして、ランの携帯を拾って階段を下りた。

その頃、ランは必死で走っていた。

ラン 「・・・ペン！！！！ごめん！！！！あたしが悪かったの・・・！！今行くから・・・ね！？」

息を荒々しくしながら言った。

そしてやっと「緊急病院」という看板が見えてきた。

ランは、ちょっとした凹凸おうちつでも転びそうになりながら、走り、病院にかけこんだ。

ラン 「あのっ……えっと……坂田ペンは!!どこなの……」

受付人は少し戸惑ったが、すぐ手元を動かして書類を見た。

受付人 「えっと……ペンさんはただいま治療を受けています。相当はでな事故みたいで……。」

受付人が、手のひらを重ね合わせながら言った。

ラン 「え……はでな事故って……例えば……どこか……?」

受付人 「まだ私もわからないんですが……ね。あなた、ペンさんのお友達?どこかで見たことあるような……。」

ちよっとほほ笑みが出た。

ラン 「ああ、自慢じゃないんですけど、毎回雑誌に出ています……アハハ。それと……」

私とペンの関係は……普通の……友……達……です。」

ランは少し言葉がつまった。

すると、『あの、』と誰かが来た。

そこにいたのはペンの母だった。

ラン 「あー！お母さん・・・ペンは・・・」

お母さんはちよつと笑うと、すぐ下を向いた。そして口を開いた。

ペンの母 「・・・・・・・・・・はでな事故で・・・・・・・・」

ラン 「どんな事故だったんですか！？」

ペンのお母さんはもつと困った顔をした。

ペンの母 「じゃあ、ちよつとその席に座りましょうか。」

といってお母さんは話を始めた。

~~~~~

それは16…14に起こった出来事・・・。

ペンはコンビニでジュースを買った後に、信号を渡ろうとしていた。

そして 青になったとき、ペンが歩き始めたとき……………

それから悪夢が始まったのだ。

まず車道の信号は赤なのに、1台のトラックがペンの渡っている横断歩道めがけて
来たらしい。

そしてペンはトラックの下敷きにされた。

その時、トラックが急ブレーキをかったため 後ろに並んでいた車7台が前から順に前の車めがけて衝突した。

Ⅱ 図で表すと ― 「トラック」 ↑ 「車1」 ↑ 「車2」 ↑ 「車3」 ・
・ ・ ・ という事だ。

衝突したそのはずみで、トラックが押し出され 次はペンは車1
の下敷きになった。

またのはずみで車1が押し出され、次はペンは車2の下敷きにな
ったと ・ ・ ・ ・ ・ 。 いうことだ。

~~~~~

ランは思わず 口に手を当てた。

ペンの母 「それでね ・ ・ ・ ・ ・ 相当はでな事故だったのよ。」

ラン 「それで ・ ・ ・ ・ ・ ペンは ・ ・ ・ ・ ・ ! ・ ・ ・ 」

すると、ペンの母がランの手を取って小声でささやいた。

ペンの母

「耳が・・・聞こえなくなったの。」



ラン  
「.....えっ?.....」



ランは一瞬お母さんの言葉を疑った。

まさか、そんな事・・・起こるとは思っていなかったからだ。

ペンの母 「それとね、」

ペンの母がかばんからハンカチを出して顔を押さえた。





ランはまさかと思った。

## 第5章―苦難―（後書き）

すごい！続きを楽しみにしててね☆

## 第6章―悲しみと恐怖―

★あらすじ★

ペンがなんと事故に！

ケイはペンになんも興味を抱かないが・・・

ランはペンを選んでしまった。

それにペンの事故はかなり　はでな事故で・・・ペンが、  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

ラン　「・・・・・・・・まさか・・・・・・・・ですよね・・・・・・・・？」

お母さんは、立ち上がってランにむかって手を招いた。

連れていかれたのは4階の126号室だった。

表札には「ペン」と書かれてあった。

ラン 「あ……。ペンの部屋ですか？」

お母さんはなずいた。

そして、入ってみたがそこにはペンはいなかった。

まだ治療中だった。

ペンの母 「それで、亡くならなくてよかったわ……。」

お母さんはボソリと言った。

ランはペンのベッドに少しだけ座った。

テーブルの上には乱暴に置いたのか ジャンパーがぐじゃぐじゃだ。

ラン 「あたし……。ペンの気持ちかわからなかったんだ……。」

ランの目には涙が浮かんでいる。

ペンの母 「え？気持ち……？」

ラン 「そうです……あたし最近、3年生の人に告白されて……付き合う事になったんですけど、それが間違っていたんだ……それで……ペンが……」

ランが腕で涙を拭<sup>ぬぐ</sup>った。

ペンの母 「いいえ、ランちゃんのせいじゃないわ……。」

すると、ベッドの下にペンのバッグが置いてあった。

ランはそれを拾ったがチャックが開いていた。

中を見てみるとそこには……。

1つの紙包みが入っていた。

ラン (……？……誰かにプレゼント?)



その紙包みは綺麗に包装され、リボンの形のシールが貼ってある。それに、小さくたたまれた メモがはさまっていた。

ランはそれをこっそり取ると、開いてみた。

そこにはこう書いてあった。

『誕生日おめでとう☆遅くなってごめん！いつも仲良くしてくれてサンキュー♪ちよつとしたものだけど、気持ちはかなりこもってるから、使ってな☆ ペンより』

あて先が書いていなかった。

ラン 「あの・・・これ誰にあげようとしたのかわかりますか？」

ランはペンの母にその紙包み渡した。

ペンの母 「え・・・？何かしら。あけてみましょう。」

そう言ってお母さんは 紙包みを開けた。

中には、金色の箱に入ったピンク色のブレスレットが入っていた。

ラン 「あっ、それ、“ランジュール・デスル”のブレスレットだ

わ」

ランはそくざに言った。

ペンの母 「・・・？ランちゃんこのブレスレットのメーカーわかるの？」

たずねてきた。

ラン 「はい、それあたしの好きなメーカーなんで！コンビニやスーパーでも普通に買えるんですよ」

するとお母さんは一度下を向いてから、顔をあげた。

ペンの母 「！！・・・ランちゃんの誕生日っていつ！？」

ランはハッとした。

ラン 「えっと、1週間前です！」

ペンの母 「そうだわ！ペンは、、、ランちゃんにこのブレスレットを買ったのよ！」

すると『カラカラカラカラカラ・・・』

タンカのタイヤの音が聞こえてきた。

医者 「あ、ペンさんのお母様と・・・カノジョ？」

医者 「お待たせしました。」

と言うとタンカを部屋に入れた。

そこには・・・白い布をかぶったペンが眠っていた。

医者 「まだ、麻酔ますいが切れていません。1時間ほどしたら目を覚ますでしょう。」

というとき看護婦たちがペンをベッドにうつした。

そして「ちよつと・・・」と医者がお母さんと2人きりになるよう願った。

ペンの母 「ランちゃん、少しお外で待っててね」

ランは病室の前のベンチに座った。

医者 「・・・・・・・・」 ペンの母 「・・・・・・・・」

なにか話している声が聞こえた。

そのうちランはウトウトしてしまった。

~~~~~

「・・・・・・・・ちゃん」

「・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・！」

「ランちゃん！」

お母さんが思いっきり肩をゆさぶった。

ランは飛び上がるように起きた。

ラン 「どどどどどど、どうしたんですか！」

時計に目をやると針は19..28をさしていた。

ペンの母 「早く来て！ペンが目を覚ましたのよおお！！！！！」

お母さんが叫ぶように言うと言ランの手を引っ張った。

ラン 「ええっー！？」

ランは嬉しいのかちょっとコワイのか・・・複雑な気持ちだった。

ーもし、このまま病室へ行ってペンがランの事を忘れていたら・・・？ー

―もし、病室へ行った瞬間に逝ってしまったら・・・―

―もし、見たくもない姿になっていたら―

色んな不安な話しが頭を横切りながらも病室に入った。

そこには、ペンがいた。少し目を開けている。

その瞬間、ランは言葉を失いつま先の血が逆流してきたようだ。

ペンの腕が片方、失っていたからだ。

それに耳も聞こえず言葉も発せない。

ラン 「…………ペン?…………」

ランはペンに近寄ったが、ペンに反応はない。当たり前のことだった…………その時は。

ラン 「ペン…………ねえ…………うそだよねえ…………」

お母さんはあせりながらランを見つめた。

ラン 「ねえ…………ペン!! 返事をしてえ! いつもみたいにチィーッス☆って言ってよお」

ランがペンの手を取った。

ラン 「ねえええええ！！！！ペン！！！！お願い・・・っだからあー
「――」

ランがおおつぶの涙をこぼして言った。

そしてへたれこむとペンの手を離れた。

するとペンはランの頭を「ぽん」と叩いた。

ランがペンの方を見るとペンは、ニツコリ笑ってくれた。

そして「大丈夫だよ」と、口を動かした。

音は無いが、安心感を与えてくれた。

ランはもっと泣いた。

〵
〵
〵

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0309i/>

☆ラブ&ピース★

2010年10月28日05時27分発行